

## 如淨会下の道元禪師

——身心脱落と面授——

佐藤 秀孝

道元禪師（一二〇〇—一二五三）（以下、単に道元）の在宋中の動静に関しては、古写本史料の出現などから問題点が複雑となり、多くの研究者が種々に取り上げてはいるが、いまだ決着をみていないのが実情である。本考では天童如淨（一一六二—一二二七）への参学後の動向、とくに身心脱落の時期と面授との関係を中心に私なりの解釈と仮説をなしてみたい。

従来、道元が如淨に参じたのは、宝慶元年（一二二五）五月一日の面授時ということで問題はなかった。それはこれまで如淨の天童山入寺が宝慶元年に入ってからであるという定説が存したからである。しかし、近年、道元に関する古写本史料の発見や鏡島元隆氏の『天童如淨禪師の研究』など如淨に関する研究が進むにつれて、如淨の天童山入寺がその前年である嘉定一七年（一二二四）秋七月か八月の頃であることが確定した。すでに伊藤秀憲氏により、道元が如淨に参じたのもこの時点からであるという新説が出されている。

古写本『建掇記』など古伝は、大慧派の無際了派（一二四

九—一二二四）の示寂で道元が落胆している時に、寧宗の請状により希代不思議にも如淨が天童山に入寺したため、その下で参学するようになったとする。ならば諸山歴遊はそれ以前ということになる。ただ「嗣書」の巻にいう宝慶の頃に天台山や雁蕩山に歴遊したとする記事が問題ではあるが、夏安居の制中を念頭にしても三月末以前には天童山に戻っていたはずである。しかるに面授を初相見と解するなら、宝慶元年五月一日まで実に前年の閏八月を含めて一ヶ月、約一月の間、道元は如淨に参じなかったことになってしまう。

訂補本『建掇記』はこの間の矛盾を都合のよいように改変しており、道元の記述とも合致させているが、無際了派や径山の浙翁如琰（一一五一—一二二五）の示寂の年時がはっきりと確定でき、如淨の入寺も定まった今日の研究上、古写本の記述はきわめて史実に近いものを含んでいることも明らかになりつつある。私も伊藤氏と同じく嘉定一七年からの参随説を採りたいが、少なくとも宝慶元年三月末には道元は天童山

の如浄の会下にあったはずである。『洞谷記』には、「浄老作三童之主来。未參見、宿疑頓釈」という表現がみられ、入室以前に道元が宿疑を解決していたことを伝えている。

宝慶元年夏安居からその直後の道元の行動を挙げてみるなら、「面授」の巻に五月一日の面授相見がなされ、「仏祖」の巻に夏安居中の仏祖礼拝の行事があり、『明全和尚戒牒奥書』に五月一八日の明全（一一八三—一二二五）の示寂から同二九日の茶毘までの行動があり、「仏性」の巻や『宝慶記』には夏安居中の阿育王山広利禅寺の晦巖大光の下への来訪があり、『宝慶記』に如浄との書簡のやり取りと七月二日からの入室の記事が記され、『日本国千光法師祠堂記』に八月九日の修職郎監臨安府都税務の虞樗の撰があり、それ以前には明全の記事を収めるべく道元が虞樗に依頼しているはずである。そして『仏祖正伝菩薩戒作法』や「授覚心戒脈」にみる九月一八日の伝戒がなされている。きわめてあわただしい動きの中にありながら、如浄との面授・入室・伝戒が着実になされていることがわかる。この間、必ずしも夏安居中に天童山に留まっていたわけではないのは問題であるが、それはおそらく明全の示寂と関わりあう特別処置であって、仏舎利信仰の霊場である阿育王山への来訪は異例といつてよく、明全の茶毘後の行動であったとみられる。

では、五月一日の面授とはいったい何であったのか。伊藤

氏は『御遺言記録』（永平室中聞書）などにより、面授における「はじめて」を特別の意味に解している。単なる初相見ではないとするのである。道元は五月一日の面授を在宋中でもっとも印象深い出来事として「面授」の巻に語っている。ならばこの時の面授を詮慧や経豪はどう解しているか。

・先師永平寺大和尚、面授の儀を前後にあげらる。これ、はしに  
はただ面授の次第をつらねられて、奥には悟道の時節をささる  
歟。所詮、悟道にかかる年紀月日、又これを用ふ。大宋宝慶元  
年乙酉五月一日。（詮慧「聞書」）

・如文、堂奥を聴許せらるとは、只堂中、若は方丈の内外なむと  
を縦横に出入あらむするにてなし、只不嫌時刻、任心法訪事  
を、堂奥を聴許するとは云也。身心を脱落するにとは、故方  
丈、天童に相見悟道の御詞、参禅者身心脱落と云なり。其をい  
ま被書載歟。（経豪「御抄」）

両者とも推測ながら、五日一日の面授相見を悟道の時節と同一時とみているのである。従来はこれを面授の初相見で脱落の境がすでに現成していたとみるのであり、単に初相見の重みを脱落のことで述べたものとして解されていた。

一般には道元の身心脱落（叱咤時脱落）は、この面授時とは別の時点でのことと解されており、面授を強調するあまり、道元には身心脱落の機縁はなかったとする新説も出されている。だが、中国禅者である如浄が大悟もしない道元を初相見

のみで印可することは認めがたい。如淨が日頃から上堂・小参の折はもちろん、僧堂での坐禅時にも拳頭とともに身心脱落の言を語っていたことは、草稿本「大悟」の巻などによってわかり、道元もはやくから大衆の一人としてこの語を聞いていたはずである。

身心脱落の機縁は、『三大尊行状記』などの伝記史料に載るのみであるが、「面授」の巻の『聞書』や『御抄』の解釈、『永平広録』巻二の「臘八成道上堂」の「一由聞得天童脱落語」而成「仏道」の言、『御遺言記録』の「先師大悟因縁、依身心脱落語、聊得力」の言などから、道元が如淨の身心脱落の語を聞いて悟道したことはまちがいないだろう。

「面授」の巻を素直に読めば、わずかに身心脱落して、面授を保任できたとするのであり、靈山拈華や嵩山得髓にも比せられる身心脱落が先にあり、面授相見がなされたことになろう。釈迦牟尼仏が摩訶迦葉に面授して「吾有正法眼蔵、附嘱摩訶迦葉」と語ったのは、初相見の多子塔前ではなく、靈山会上的の拈華微笑の際であり、嵩山で菩提達磨が二祖慧可に面授して「汝得吾髓」と示したのも、慧可断臂の初相見ではなく、礼拝得髓した時の印可の言であった。黄梅山で五祖弘忍が六祖慧能に伝衣したのも、嶺南仏性の初相見ではなく、伝法偈を経て後の三更の付法相承の時点のことである。洞山良价における面授が何を意味するかは明確ではない

が、少なくとも先の三例をここに当てはめるとすれば、いまいち面授という表現も単なる初相見を意味することではないことになる。得法の事実を背景になされた師と弟子の悟道印可の儀式こそ面授ではなかったのか。

したがって、道元は面授した時点で身心脱落したのではなく、身心脱落したからこそ妙高台で如淨との面授がなされたのである。面授を初相見と解したがために、面山瑞方（一六八三—一七六九）は古写本『建撕記』を大幅に改訂して訂補本『建撕記』を作らざるを得なかった。それはまた面山の宗学そのものの、たとえば未悟嗣法の問題など、江戸宗学の根本に関わる大事でもあったわけである。

叱咤時の身心脱落と面授相見はかなり近時の間になされた出来事ではないか。具体的にいえば、前日の五更の坐禅の時に身心脱落の機縁があり、そのことを前提として五月一日の方丈妙高台での印可と面授がなされたのではと考えるものである。すなわち面授時脱落ではなく、脱落時面授ということになる。しかし、道元自身は自らの身心脱落の機縁を何ら具体的に伝えていない。待悟為則の立場で身心脱落がとらえられることを嫌って、悟りの機縁をむやみに書き記さなかったのかもしれない。したがって、道元の身心脱落の機縁が、伝記史料の通りであったか否かには問題も残ろう。

道元は『御遺言記録』において、伝法以後は威儀を具せず

に自由に入室するということを義介（一二一九—一三〇九）に伝えている。当然、如浄と道元の場合も同様であったはずである。ならば、『宝慶記』冒頭の道元の上覆文と如浄の返答文は、単なる参随を願う書面のやり取りではなく、身心脱落と面授相見を経た後の、入室に関する両者の儀礼上の書簡であったことにならう。でなければ、道元が自ら「時候に関わらず威儀を具せずに方丈に上つて質問したい」という不遜ともとれる表現はしなかったはずである。

ただ、問題は『宝慶記』をどう解するかにかかっている。

内容的に一見、初歩的ともとれる質問や「身心脱落者、如何」というような質問がみられることから、身心脱落以前の記事であるとする意見が強い。しかし、道元の質問はすでにある程度、如浄の答えを予想してなされている感がある。身心脱落して入室を許された道元が、如浄の中に古仏の風光を垣間見んとした記録こそ、『宝慶記』ではなかったのか。理としては道元には解決されていても、現実の修行の面でそれをどう実践していくかが問題であったのか。道元は自身の徹底した納得のために、すべてにおいて如浄の点検が欲しかった。どんな些細な初歩的ともみえる問答も、必要なほど周到な貴重な古仏との対話であったのではなからうか。

広福寺本『仏祖正伝菩薩戒作法』の奥書や泉福寺本「授覚心戒脈」のほか、古写本『建撕記』などによれば、道元は宝

慶元年九月一日に如浄より伝戒、すなわち中国曹洞宗伝来の「仏祖正伝菩薩大戒」の相承を得ている。伝戒は伝法を許された人にして、はじめて伝えられるものであり、先の身心脱落や仏祖礼としての面授を前提となされた厳肅な儀式である。そんな道元にして、なお宝慶三年（一二二七）夏までの如浄への随侍が必要であった。道元はまさに悟上得悟を実践し、身心脱落後の入室をも重んじた禅者であったわけである。そこに曹洞の綿密な学風をみることができよう。

以上、述べた身心脱落と面授に関する見解は、いまだ史料的に乏しく、一つの推測・仮説でしかない。しかし、これは宗学上、きわめて重要な課題でもある。身心脱落をどうとらえるか、仏祖の面授とは何なのか。単なる初相見ではなく、目の当たりに師が法門を授け、弟子が受ける高次の意味ではないのか。もちろん待悟為則を否定しつつ、一回限りの脱落に終わらず、つねに新たに身心脱落し続ける、仏祖向上事の連続としてとらえていく面も道元には存する。ただ、従来いわれている初相見で法門が現成し、そのみですべてが完結円成しているとする立場は、安易な宗学に陥りやすい面なしとしない。道元における面授のもつ意義をいま一度、問い直してみたいのが、今回の論考である。

（註略）

△キーワード▽ 如浄と道元・身心脱落・面授

（新潟県少林寺住職）